

#### (4) 意識調査の結果

移住定住すみよか計画策定推進委員会では、平成26年1月に町内の企業にお勤めの従業員の方、陸上自衛隊飯塚駐屯地の自衛隊員の方、JR九州小竹駅利用者の方等を対象にして、移住定住に関して住環境に対する日頃からの考え方や現在、将来に向けての小竹町にとって必要と思われる施策等をお尋ねするアンケートを実施しました。

このアンケート調査結果から、次のような問題があげられます。

##### ①小竹町の住み心地・定住意識

町内居住者について、全体の42%の方が「とても住みやすい」または「どちらかといえれば住みやすい」と回答され、28%の方が「どちらともいえない」と回答、「どちらかといえれば住みにくい」「とても住みにくい」は28%でした。

町内居住者について、全体の38%の方が「ぜひ小竹町に住み続けたい」と回答、「条件が合えば小竹町に住み続けたい」が28%、「小竹町に住み続けることは考えていない」の回答者は、実に34%にもものぼりました。特に「住み続けたい」が4割弱というのは他の市町村に比べて相対的に低いと考えられ、現居住者の定住意識の低さは大きな問題です。

##### ②小竹町の良い所、悪い所

1番の公共交通の充実から23番の観光・交流事業の充実までの回答をグラフにすると次図のようになります。

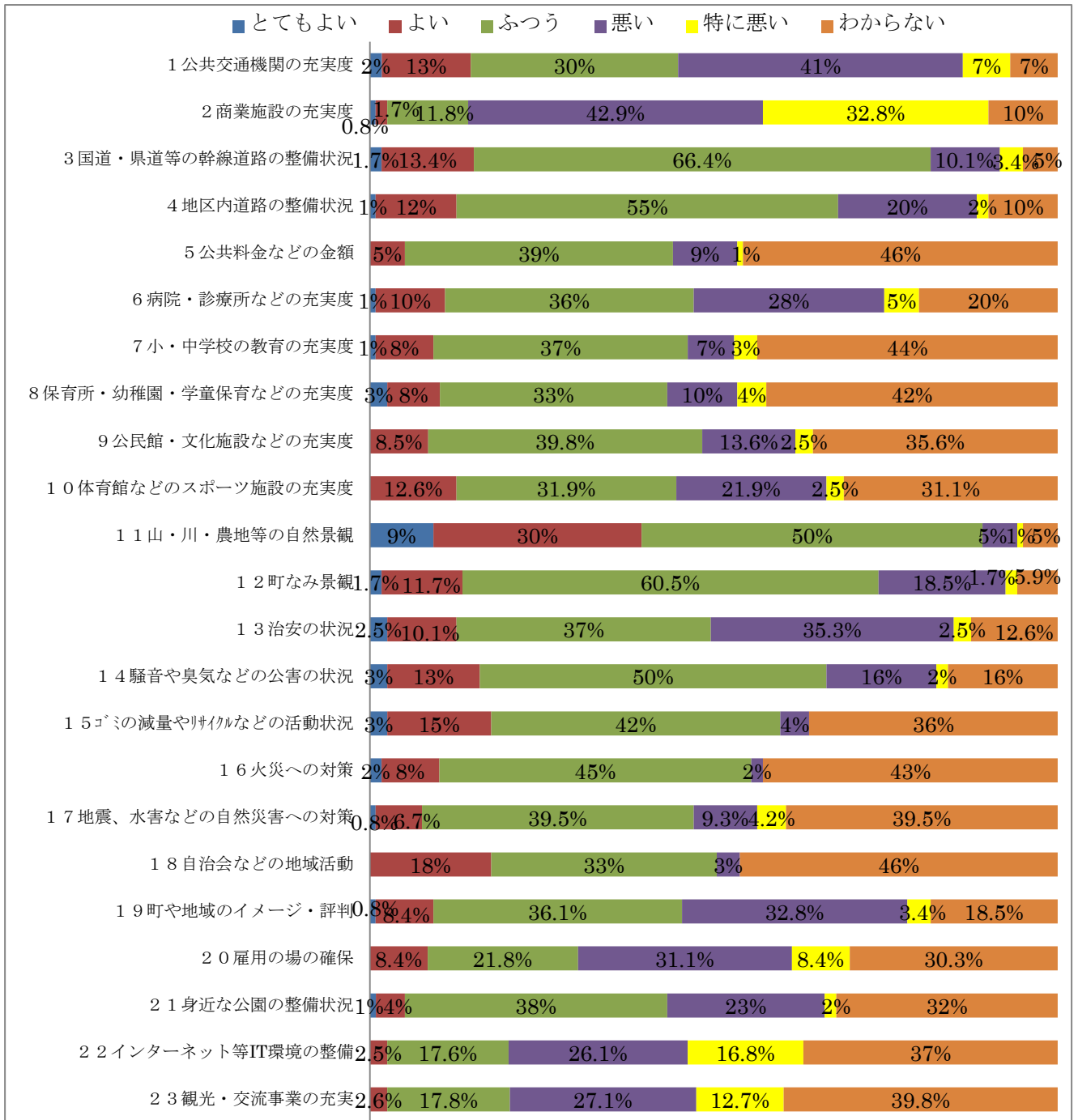
なお、自然景観の保全と活用、ゴミの減量やリサイクル対策、自治会などの地域活動の促進や教育環境の充実など、評価が高い項目にもかかわらず、上記の①小竹町の住み心地や町民の定住意識に繋がっていないことが現在の状況であります。

##### ③IT環境と情報発信について

アンケート調査において、小竹町の良い所、悪い所の設問で、非常に評価の低かった内のひとつが、IT環境の整備についてです。特に町内居住者が「悪い」・「とても悪い」と回答される傾向が顕著でした。

また、自由意見や小竹町に対するイメージにおいて、「何もないイメージが強い」との回答が多く、内外に対する町の情報発信が十分でないということが伺えます。

図 アンケート結果（町の良い所、悪い所）

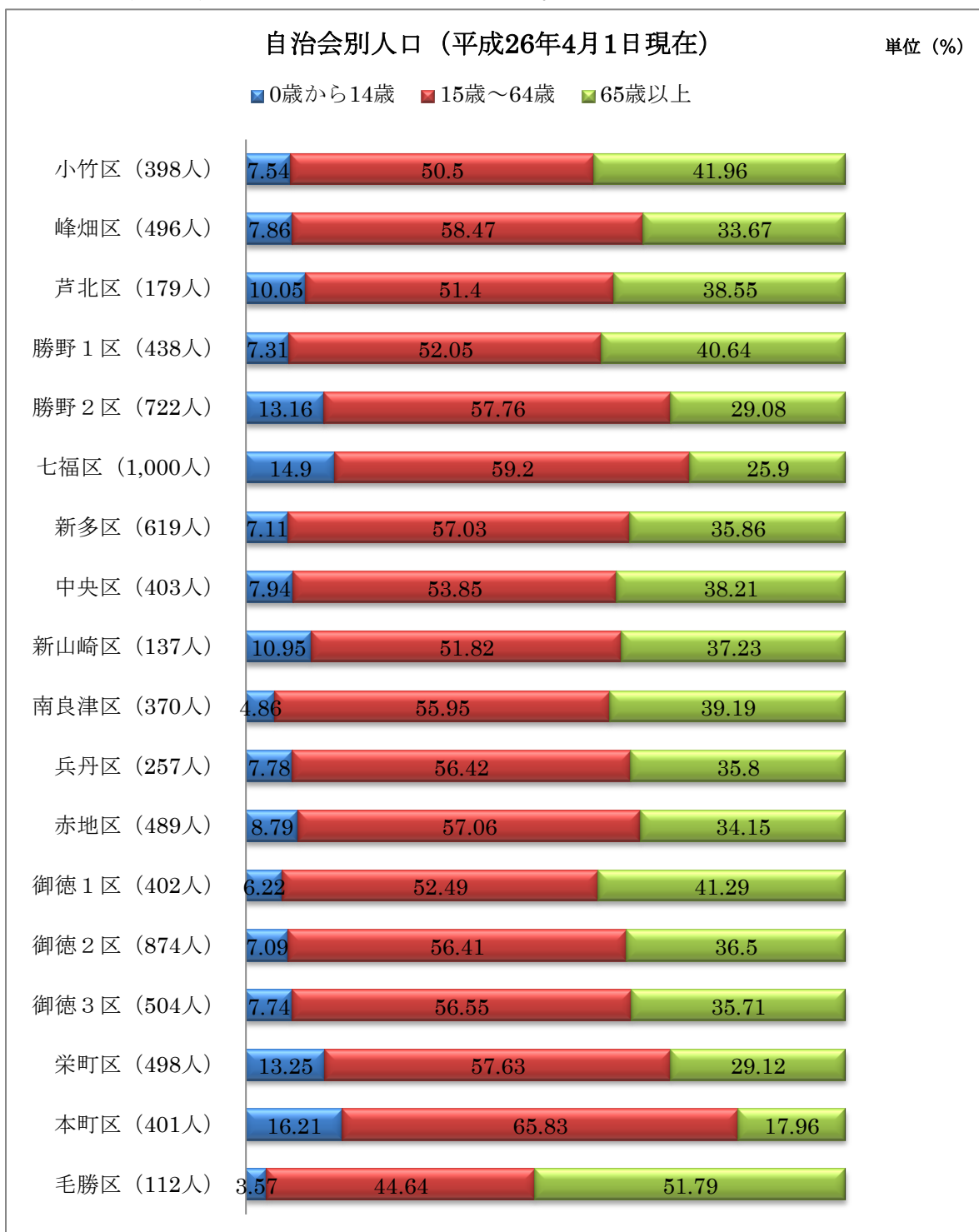


## (5) 地域コミュニティの実態

小竹町内での18自治会別の人口と年齢別構成は、下表のようになっています。

国勢調査人口からも推測されるように、現状のまま推移すると高齢者を支える立場である地域の若い世代が減少し、地域での支え合いが困難な状況となります。世帯の核家族化や単独化は、結果として自治会内での近所付き合いの減少に繋がります。

自治会長会との話し合いの中で、次の世代の担い手が不足している現実を聞き及んでおります。地域のコミュニティの低下と世代間交流の減少は、結果として地元への愛着の薄れを生み、地元離れが加速することになります。



## 2 課題

小竹町における人口減少について、平成17年の国勢調査人口9,253人が平成22年の調査では8,602人であり、△651人(△7.0%)となっています。特徴としては、若年者の減少率が平均の減少率を相当上回っており、若年者の減少傾向が人口減の大きな要因と考えられます。

このような人口の減少に対する今後の課題としては、次のようなことが考えられ、町民や地元企業の協力による移住定住対策を確立していくことが重要です。

### (1) 慢性的な人口減少による地域の停滞

インフラ整備を含めた住環境について、道路や下水道などの整備状況は周辺の自治体と同程度の水準にありますが、町内には若い人が住みたくなるような利便性の高い場所に住宅地やアパートなどが少なく、満足ができるものではないと思われます。

また、西鉄バス路線の一部廃止などにより、交通の利便性についてのマイナスイメージがアンケートにも表れています。今後、巡回バスの増台、増便等を行い、行政による買物弱者対策を充実させることが課題です。

### (2) 少子高齢化への対応不足

平成22年の国勢調査の数値において、小竹町での15歳未満の全体人口に対する比率は10.8%であり、福岡県平均の13.6%を大きく下回っています。

また、65歳以上の高齢者比率は31.0%と福岡県平均22.3%を大きく上回っています。

平成25年の小中学校の児童生徒数は、10年前の平成15年の713人から540人と173人も減少しており、学校運営に少なからずとも影響を与えています。

少子高齢化の問題は、小竹町だけの問題ではなく全国的な課題ではありますが、県平均などとの数値の格差は、今後、急速に広がる懸念があります。

少子化による農業、商業の後継者不足問題や伝統文化や祭りの継承者不足、参加者減少問題、加えて高齢者単身世帯や高齢者夫婦のみの世帯が増えることによる日常生活に支障を来す事例などの増加が懸念されます。

このため、少子高齢化に対する施策としては、子育てに最適な環境づくりや高齢になっても健康で安心して暮らせる環境づくりが、究極の課題であると考えます。

健康な状態で長生きできること、これは万人の願いであり、そのための健康維持増進、疾病予防対策が、今後、必要となります。また、高齢化の進行により、高齢者の現役状態での活躍の場の提供が、社会問題化しています。

### (3) 地域の魅力を住民が十分に実感していない

小竹町在住の町民に対するアンケート結果で、町に魅力を感じていない町民が、他の市町に比べて多いと思われます。町の特産品であったり、町を誇れるようなモノがないことについて、多くの町民が地域の魅力を実感していないこと、そのため結果として町のイメージが薄く、定住意向に結びつかないという相関関係にあることが窺えます。

また、町外からの来訪者が少なく、町民の多くが町外の人と触れ合う機会に恵まれていません。このような状況を鑑みると、今後は、おもてなしの心を持って多くの人と触れ合うことにより、ひいては地域への愛着が生まれ定住意識も育つと考えられることから、町の新しい魅力を創出し、町外の多くの人々が訪れたいくなるようなまちづくりが課題です。

#### **(4) 地域コミュニティ機能の弱体化**

全国的な流れではあるものの、町民の自治会加入率が年々低下しています。あるいは、自治会には加入していても、自治会組織への関心度は薄れ、地域での連帯主義や共同意識は低下し、若い世代を中心に地域行事に対して参加者が減少しています。

このような時だからこそ、地域を再生し活力を取り戻すために、地域内でのコミュニティづくりが、最も重要な課題となってきます。

総合計画の将来像としている協働・共生のまちづくりを進めるため、地域の課題解決やさらなる活性化を目指し、地域づくり計画等の策定支援や情報提供を行うなど、新しい取り組みが課題となります。

#### **(5) 町の総合的な情報発信不足**

小竹町は、その昔から町内に長崎街道を有する交通要衝の地であります。各所へ通じる道路網は、利便性の高いものであり、日々の生活において、職場への通勤、商業施設や病院などの施設へのアクセスを容易にしています。また、町内を南北に走るJR筑豊本線は、電化の完了によって運行本数も増加し、小竹駅については、駐車場も整備が進んだことから、年々乗降客が増加しています。さらに、町内には第3セクターによる平成筑豊鉄道の駅もあることから、周辺の市町村と比べても交通の利便性は非常に高くなっています。

しかしながら、現在、このような行政情報を外向けに常に効率的に発信することが、まだ不十分であると思われ、ホームページの充実や広報公聴活動の活性化が非常に重要となっています。

#### **(6) その他 定住化に係る課題**

人口の減少が急速に進む中、新たな子育て環境づくり、産業振興や住宅環境整備施策の充実、地域協働施策の定着、拡充など、定住促進対策に関しての総合的な施策の充実強化が求められています。

しかしながら、施設建築、建て替え等の建設的事業については、長期的な期間を必要とするため、人口増加のためには短期集中的な施策が必要となります。

短期集中的な対策の先進事例としては、結婚活動いわゆる「婚活」事業、結婚祝金、出産祝金、新規の転入者に対する住宅取得助成など、多種多様な助成制度があります。現在、小竹町には、こういった直接的な助成制度はありません。助成金だけで解決を図る方策は、やや疑問視されるものの、移住定住のための簡易的な条件整備として、移住者を町内に呼び込むために町の魅力を伝え、わかりやすいセールスポイントとしての方策整備は考えていく必要があると思われ、直接的な助成金事業は、効果が測定しがたいものもあることから、期間を設定し随時検証しながら、見直しが今後の検討課題であると考えます。

また、移住定住について重要な施策として、住宅環境の整備、雇用の確保などが挙げられますが、これらは民間企業の協力や地域住民による「おもてなし」力の向上が非常に重要な要素となってきます。平成21年度に実施した新多定住促進住宅団地整備事業のような、結果が即座に分かるような事業は稀であり、道路網の整備や交通の利便性の向上など、長期的に取り組まなければならない課題もあります。

さらに、現在、小竹町で暮らしている若年層に対して、就職後もこの町で暮らしたいと思えるような魅力あるまちづくりを推進することによって、社会動態による人口の減少を抑制し、定住化を促進していくことが重要な課題であります。

### Ⅲ 計画の体系

#### 1 基本理念

人口減少や少子高齢化は、我が町だけの問題ではありません。国の大きな課題でもあり、今、市町村間で住民の奪い合いが生じています。3市に囲まれた人口1万人に満たない小さな小竹町が、この競争に打ち勝つには、行政はもちろんのこと、町民も強い危機感を持ち、一体となって努力しなければ、現状からの脱却は見込めません。周辺の市も人口減少を抑制しようと、必死になって各事業に取り組んでいます。周辺市と同じ程度に取り組んでも、実を結ぶことはむずかしいと思われま

す。今後は、如何に自然動態による人口減少を抑え、社会動態による増加を図るかがポイントですが、人口構成比率が高い60代の団塊の世代が今後さらに高齢化することから、大幅な人口減少が予想されます。一方、女性の20～40代は減少傾向にあることから、今後、さらなる出生数の減少が予想されます。したがってこのまま推移すれば自然動態は、ますますマイナスになることは確実です。

ちなみに、小竹町では自然動態と社会動態がマイナス傾向で同時進行しており、10数年後の将来人口は7千人を下回ると予想され、ますます町の活力が失われていきます。

自然動態による人口減少を抑えるには、若い世代の移住増加で、出生数を可能な限り増やすことが重要です。言い換えますと若者を中心とした転出者をできる限り抑制し、若い世代の転入を大幅に増やして、社会動態の増加を図ることが必要です。

それでは、町内に安価な住宅地や住宅を確保し、雇用の場を確保すれば、移住者が増えるかといえば、必ずしもそうとは限りません。町に住みたくなるような魅力がなければ、外から移住者は来ません。今、小竹町に求められるものは、多くの町民が強い郷土愛に目覚め、自信と誇りを持って暮らすことです。自分が住んでいる地域に魅力をあまり感じず、郷土愛が薄ければ、住みやすさに対する満足度は低下し、定住意識は薄れ、町外へと流出していきます。町民の定住意識が低いところに、移住者はやってきません。町民の定住意識を高めながら、併行して移住促進に取り組む必要があります。

町民の定住意識を高めるためには、公共施設の整備、産業の活性化、教育、子育て支援など、行政主体の総合的な取り組みが欠かせませんが、一方で『自分たちの地域は自分たちで創る』

を基本に、老若男女がそれぞれの生き方や立場を理解尊重し、人間関係が良好な、みんなで支え合う地域を、町民自ら努力し創っていくことも重要です。具体的には自治会、地域づくり団体、企業等と行政が互いに知恵を絞り、地域の資源を十分活用しながら、地域課題を解決していくなど、誰もが住みたくなる地域を創っていくことです。これはまさに“地域づくり”そのものです。高齢化をマイナスに捉えず、高齢者が持つ豊かな経験、知恵、技を地域づくりに活かすとともに、人口で男性を上回る女性のパワーを地域活性化に活用します。「行政によるまちの魅力づくり」と「住民による地域の魅力づくり」の2つの魅力づくりに町民と行政が協働で取り組むことで、町民は次第に今以上に地域に愛着を感じ、郷土愛を育むことになり、その結果、町民の定住意識は次第に高まるでしょう。

まちや地域の魅力が高まれば、それらの魅力を伝える総合的な情報発信力が不可欠です。つまり、町民・地域・企業・行政が一体となって、町外の人々の心に届く情報発信が求められます。

そのことで、次第に来訪者は増え、地域に愛着を持つ住民が、おもてなしの心を持って温かく接すればリピーターも増え、そうした中から、移住者が現れるかもしれません。小竹町には、今、これといった観光の目玉はありませんが、自治会、地域づくり団体、企業等が行政と協働し、地域資源を活かした個性ある地域づくりに取り組み、それを観光と結びつける「観光まちづくり」を展開することで来訪者を増やすことが可能です。これは全国的な動きにもなっています。

このように、まちや地域の魅力づくりを通じて、町民の地域への愛着を深め、郷土愛を育み、自信と誇りを持って暮らす町民の姿を形成することで、定住意識を高めていきます。そして、まちの情報を総合的に発信し、情報に触れて訪れた人々には、おもてなしの心で温かく接しながら、“訪れたい”“移住したい”という声が高まるような『川と緑と優しいひと「すみよか」こたけ』を目指します。

《キャッチフレーズ》

## 川と緑と優しいひと「すみよか」こたけ

### 2 基本理念に基づく主要テーマ

#### (1) 住み続けたい、移り住みたいまちづくり

小竹町での人口減少の特徴として、若年者の人口減少率が全体の減少率より非常に大きく、このことが、結果的に人口減少傾向に拍車をかけているといえます。

若年者の転出には様々な要因があると言えますが、就職や結婚を機会に、より快適な住環境を求めて転出する事例が見受けられます。

小竹町としても、移住・定住者に対して住みよい環境づくりのための対策を講じることによって、結果的に地域の活性化を取り戻すことに繋がっていきます。

## (2) 子どもが伸び伸び育つ、生涯現役のまちづくり

小竹町では、今までにも数多くの子育て支援施策を実施してきましたが、少子化が急速に進行していく現状を踏まえて、新たに様々な子育て支援策の充実に努め、次世代を担う子ども達の成長を地域全体で支えていく取組みに努めていきます。

加えて、町内での高齢化が急速に進行する中、町民が健康で、あらゆる不安感を払拭しつつ、安全で安心して暮らすことが大切です。また、知恵や知識を有する高齢者がまちづくりや子育てに関わり、高齢者自身も生きがいをもって暮らす仕組みも進めていきます。

町民が、健康で元気な毎日を送れることは、最も重要な問題であります。

このためには、町民一人ひとりの健康の維持増進、疾病予防対策を図ることとします。

その施策の実現のために、保健センターを中心として、幼児から高齢者に至るまでの保健事業を充実強化し、健康づくり事業を推進します。

このような施策の充実は、定住促進をより一層進め、移住の実現化を促すものと思われれます。

## (3) まちや地域の魅力が実感できるまちづくり

小竹町内での豊かな自然を感じつつ、優れた景観に恵まれていても町の特産品や他に誇れるようなモノやコトに欠けていると思われるために、多くの町民が地域の魅力を実感していません。

そのために、伝統文化の保存・継承に努めて、町民相互の交流や地域力の向上を図り、地域の連携相互による活性化や新しい文化の創造を目指します。

また、優れた農畜産物や企業誘致の推進による新規の企業立地、あるいは商業形態の新たな展開を求めて、その必要性に見合った施策を検討していく必要があります。

最近の新たな施策として、観光によるまちづくりを推進する動きがあります。町外からの来訪者を増やし、小竹町のあらゆる地域資源と触れ合っ、小竹町の良さを再発見していただき、まちづくりに活かそうとするものであり、これらの施策の充実強化に努めていきます。

## (4) 老若男女みんなで創る絆のまちづくり

町民の自治会加入率が年々低下傾向にあることは、どこの自治体でも深刻な問題であります。まちづくりの主役はそこに住む住民であり、決して行政側の主導で行うものではありません。そのため、町民と行政との連携をより一層図り、地域コミュニティの醸成に努めることが重要です。町民と行政が一体となって、住みよい町を創造することが移住定住に大きく寄与するものと考えられます。

定住促進のための大きな要素としては、小竹町に永住するだけの魅力を感じることができかにあります。この地域魅力の一つである社会教育環境の整備や地域活動などをはじめ、生涯学習等の充実に努め、町民が心豊かでうるおいと生きがいのある生活が営めるような施策に取り組んでいきます。



## **(5) IT環境の充実と情報発信のまちづくり**

若い世代にとって、IT環境は、移住定住の適地を選択する要素として重要なものです。

具体的には、光回線敷設の問題があります。高速情報通信環境の整備は、現代社会にとって必要不可欠の問題であり、新たな通信技術力の導入等を検討しながら、環境整備を進めていく必要があります。

また、IT環境の他にも情報の発信にはいろんな伝達手段があります。町内で素晴らしい移住定住の施策を実施していても、どのように情報を発信して、どういうことを伝えていくのが大切です。今後は、新たなIT環境を含めたあらゆる情報媒体を活用し、定期的に新鮮な情報を発信していくことが重要です。

役場内の窓口機能の充実は、各種証明書の交付や各種手続き等、町民の利用頻度が最も高い現状から、重要なことと位置づけられています。来庁者の利便性、安全性、ユニバーサルデザインに配慮し、明るく入りやすい窓口空間が求められ、様々な手続きを建物の1階だけで完結させるワンストップサービスの実施等を検討していくことが必要であると考えます。

## **3 目 標**

この計画においては、ある一定の目標を定め、移住定住施策の指針とします。目標設定についての基本的な考え方として、地域協働施策の推進により、町民、関係団体、行政が連携して何事にも取り組んでいくこととします。また、人口減少の抑制のためには年齢別のバランスが大切であり、若年世代が転出していかないような対策を講じることとします。更に、既存概念にとらわれずに新しい町の魅力を創造し、町外へ発信していきます。

短期的目標を3年間、中長期的目標を5年～10年後とします。

### **(1) 短期的目標**

- ・各課題に対する施策のうち、新規短期目標施策の50%以上の事業化達成
- ・新しい町の魅力（自慢できるコト、モノ）の掘り起こし

### **(2) 中長期的目標**

- ・社会動態による人口の継続的な増加（転出者数より転入者数が上回る。）
- ・新しい町の魅力（自慢できるコト、モノ）の創出